

中期青銅器時代

B地区では、幅がおよそ2 mもある広い壁が検出された。斜面に沿うように南北に走る壁と、それと接続して内側から支えるように東西に走る壁である。これは中期青銅器時代に建造されたもので、上部テルを囲む周壁の一部であったと考えられる。露出している石列を追って観察すると、この周壁は南側ではつながりが認められるが、北側半分では多くの石がなくなっており、そのつながりは認められない。後の時代、アクロポリスで建てられた建造物に使うために石は持ち去られたものと思われる。したがってこの周壁がA地区で検出されている城門遺構と接続するものかどうかは不明である。

後期青銅器時代に入ってもしばらくは周壁は継続して機能していたと推測されるが、ある時期に周壁は機能しなくなる。その後に、この周壁の残骸を取り込み、再利用する形で階段状建築物が建造されている。この階段状建築物は何に使われたかは判然としない。あるいは実際に階段として使っていたのかもしれない。階段に隣接して建物が建てられおり、斜面に合わせて暮らしていた当時の様子を彷彿とさせる（巽）。



中期青銅器時代の周壁（B地区）



幼児を埋葬した土器棺墓（D地区）



D地区の土器棺墓

D地区ではテルの周壁の内側に中期青銅器時代の居住地が形成されていたと考えられるが、後期青銅器時代の建造物によって壊されてしまったため、概して遺構の残存状況が芳しくない。それでも攪乱を免れた地点からは、中期青銅器時代ⅡB期の壁と床面が断片的に検出されている。この床面からは大きな壺が粉々になった状態で出土した。さらに壁の付近からは、床下に埋葬された2基の土器棺墓が検出されている。1つは1歳半の幼児を埋葬したもので、半分に割った壺の中から右側臥の人骨が検出された。一緒に出土した小壺は副葬品で、おそらく遺体の上に乗せられていたようだ。もう1つは、生後1カ月の乳児の埋葬であった。被葬者は口縁部を打ち欠いた壺の中に納められ、その傍らには、副葬品

の小壺が添えられていた。このように乳幼児を土器棺に納めて床下に埋葬する習慣は、メソポタミアでは既に4千年紀末には定着しており、中期青銅器時代になってレヴァントに伝わったようだ。土器棺埋葬の類例は中期青銅器時代の居住地が発掘された多くの遺跡で報告されており、それらに見られる一般的な傾向として、被葬者が2歳以下の乳幼児であること、その頭部が土器の口縁部側にくるように納められていること、小壺が副葬されていることを挙げることができよう。なお、被葬者の頭が土器棺の「出入口」に向けられているのは、そこから出て、この世に生まれ変わるという宗教観を反映しているとされる。また副葬品の小壺は被葬者の口元に置かれた状態で出土することが多く、その中身は、葬送儀礼の過程で、あるいは黄泉の国で、被葬者が飲むための水であったかもしれない（小野塚）。